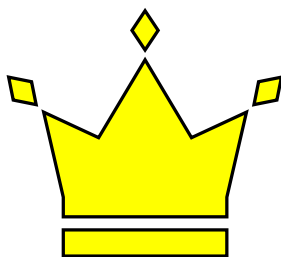


第2回

語用論グランプリ

ことばの使い方を
誰よりも熱く、面白く語る！



13:40～ First Stage グループA

14:30～ First Stage グループB

15:30～ Final Stage

16:00～ 表彰式



山本英一
レトリックと語用論



首藤佐智子
前提・推意・法と言語



柴崎礼士郎
歴史言語学・談話分析



大塚生子
イン/ポライトネス



谷口一美
認知言語学



名嶋義直
批判的談話研究

2023年 | 9月9日(土)

13:30～

会場：早稲田大学（対面）／ZOOM（オンライン）

※会場の詳細およびZOOM URLは、いずれも事前申込者のみに後日お知らせします。

申込：<https://forms.gle/VFHE9Fh2naV6UZJn7>

主催：日本語用論学会
The Pragmatic Society of Japan

共催：言語系学会連合

早稲田大学言語情報研究所





出場者のプロフィール

<p>柴崎礼士郎</p> <p>歴史言語学 談話分析(文法化、 言語接触、定型表 現等)</p>	<p>明治大学総合数理学部教授。ブリティッシュ・コロンビア大学英語英文学科客員教授(2023-2024)。カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校Ph.D.(言語学)。専門は歴史言語学、談話分析(文法化、言語接触、定型表現等)。編著に『言語文化のクロスロード』(文進印刷2009)、『英語史における定型表現と定型性』(共編 開拓社 2023)、<i>Grammaticalisation of Discourse Markers in East Asian Languages</i> (Special issue, <i>East Asian Pragmatics</i> 2021, <i>Equinox</i>), <i>Formulaicity in Japanese Interactional Discourse</i> (Special issue, <i>Journal of Japanese Linguistics</i>, De Gruyter Mouton 2023)等。論文集に収録されたものに"Sequentiality and the emergence of new constructions" (H. Cuyckens et al. (eds.) <i>Explorations in English Historical Syntax</i> (John Benjamins 2018)), "From parataxis to amalgamation" (K. Bech & R. Möhlig-Falke (eds.) <i>Grammar-Discourse-Context</i> (De Gruyter Mouton 2019))、第30章 (It/there is) no nay の歴史的推移と文法化の漸次性について(菊池清明・岡本広毅(編))『中世英語文学研究の多様性とその展望』(春風社2020)等。訳書にジョーン・バイビー『言語はどのように変化するか』(共訳 開拓社2019)等がある。「日本英語学会賞(論文)」等受賞3件。</p>
<p>山本英一</p> <p>レトリックと語用論</p>	<p>関西大学国際部教授。博士(文学、関西大学)。専門は、英語学(語用論・意味論)。いわゆる「言外の意味」を中心に、言葉の意味が伝わるメカニズムの解明を目指す。日本語用論学会、日本英語コミュニケーション学会、日本英語表現学会などで理事を務める。主著に『謎解きとコミュニケーション—語用論から西欧の知を考える』(関西大学出版部、2023年)、『ウソと欺瞞のレトリック: ポスト・トゥールース時代の語用論』(関西大学出版部、2021年)、『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』(関西大学出版部、2002年)など。共著に <i>English for the Global Age with CNN International</i>, vol.22. (朝日出版、2021年)、<i>English for the Global Age with CNN International</i>, vol.21. (朝日出版、2020年)など。分担執筆に『21世紀のESP:新しいESP理論の構築と実践』(大修館書店、2010年)、『ESP的バイリンガルを目指して: 大学英語教育の再定義』(大阪大学出版局、2008年)など。</p>
<p>首藤佐智子</p> <p>前提・推意 ポライテネス 法と言語</p>	<p>早稲田大学法学部教授。ジョージタウン大学Ph.D.(言語学)。専門は、語用論(前提、推意、ポライテネス)、法と言語。主著に『The Presupposition and Discourse Functions of the Japanese Particle Mo』(Routledge, 2002)、分担執筆に『法と言語—法言語学へのいざない』第9章、第10章(橋内武・堀田秀吾編、くろしお出版、2012)、主な論文として、How to Translate Apology and Non-apology in Legal Contexts: A Linguistic Analysis of Potentially Serious "Subtle Mistranslation" in Japan (<i>International Journal for the Semiotics of Law</i> 32(4), 2019)、「ポライテネス方略を伴う評価提示発話に対する聞き手の『値踏み』行動を考える—「微妙な」を中心に—」(『聞き手行動のコミュニケーション学』(村田和代編、ひつじ書房、2018))、「残念な」の客観化にみる語用論的制約操作とポライテネスの希薄化現象」(『語用論フォーラム1』加藤重広編、ひつじ書房、2015)。</p>
<p>谷口一美</p> <p>認知言語学</p>	<p>京都大学大学院人間・環境学研究科教授。博士(文学、大阪大学)。専門は認知言語学(認知文法、認知意味論)、構文文法、英語学。主著に『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』(研究社 2003年)、『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』(ひつじ書房、2005年)、『学びのエクササイズ 認知言語学』(ひつじ書房、2006年)、共編著に『はじめて学ぶ認知言語学:ことばの世界をイメージする14章』(2020年、ミネルヴァ書房)、分担執筆に <i>A Systems Approach to Language Pedagogy</i> (Springer, 2019年)、<i>A New Approach to English Pedagogical Grammar: The Order of Meanings</i> (Routledge, 2017年)、『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』(畠山雄二編、開拓社、2012年)、『くらべてわかる英文法』(畠山雄二編、くろしお出版、2012年)など。</p>
<p>名嶋義直</p> <p>批判的談話研究</p>	<p>琉球大学グローバル教育支援機構教授。博士(文学、名古屋大学)。専門は批判的談話研究、批判的リテラシー教育、シティズンシップ教育。主著に「語用論から批判的談話研究へ—日常言語の分析を通して談話主体の持つ権力性・政治性を可視化する社会実践」(『日本語学』、2022)、『批判的談話研究をはじめ』(ひつじ書房、2018)、編著に『リスクコミュニケーション—排除の言説から共生の対話へ』(明石書店、2021)、『10代からの批判的思考—社会を変える9つのヒント』(明石書店、2020)、『民主的シティズンシップの育て方』(ひつじ書房、2019)、『メディアのことばを読み解く7つのこころみ』(ひつじ書房、2017)、共編著に『右翼ポピュリズムに抗する市民性教育—ドイツの政治教育に学ぶ』(明石書店、2020)、『3. 11原発事故後の公共メディアの言説を考える』(ひつじ書房、2015)など。</p>
<p>大塚生子</p> <p>イン/ポライテネス</p>	<p>大阪工業大学工学部講師。博士(言語文化学、大阪大学)。専門はイン/ポライテネス研究、コミュニケーション論。主要論文に「マウンティングをイン/ポライテネス研究から考える」「イン/ポライテネスと感情」(山下仁・大塚生子・柳田亮吾編著『イン/ポライテネス研究の新たな地平: 批判的社会言語学の広がり』三元社、印刷中)、「ママ友の対立場面におけるイン/ポライテネス分析: 感情と品行のフェイスワーク」(滝浦真人・椎名美智編著『イン/ポライテネス: からまる善意と悪意』ひつじ書房、2023年)、「日常会話における差別の(再)生産について: ヘイトスピーチ(差別的談話)をマイクロレベルで考える」(『大阪工業大学紀要』2019年)、「イン/ポライテネスと会話における『期待』: 夫婦間会話の対立場面の談話分析を通して」(三牧陽子、村岡貴子、義永美央子、西口光一、大谷晋也編『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』くろしお出版、2016年)などがある。</p>